

お茶わんいっ ぱいの幸せ

峰山小学校 五年 笠原 穂

「疎開して何？ひいおばあちゃん。」

曾祖母と一緒に戦争についての番組を観ていた時に、私と同じくらいの年齢のたくさんの子どもたちが、大きなリュックを背負って汽車に乗っている姿が映っていました。そして、ナレーションで、疎開という言葉が何度も出てきたので、私は曾祖母に、どういう意味なのかを聞きました。

「都会は空しゅうが激しかったんだ。だから都会の子どもたちが、田舎に来て泊まってんだよね。それが疎開だ。ひいばあちゃんの家にも、東京からいっ ぱいの子どもたちが来てたんだ。今思うと、親元から離れて暮らすのは、さびしかった。ぺな。東京から来た子どもたちは空腹で、こっちでご飯を食べた時は嬉しそうだったぞ。すごい勢いで、ご飯を食べていたんだから。」

と、疎開のことを話してくれました。

曾祖母は、昭和六年生まれで戦争を経験しており、実家が寺でしたので、疎開先として東京から来た子どもたちを受け入れていました。曾祖母の実家も、米を手に入れるのは大変なことでしたが、東京の子どもたちは本当に食べる物がなく、疎開後、しばらくの間は心も体も元気がなかったそうです。そんな子どもたちを見て、少しずつ元気づけようと、曾祖母たちは、さつまいも入りのご飯や小豆入りのご飯をこちそうしました。また、親元から離れて暮らすさびしさから、夜泣いてしまふ子どももいましたが、食事の時には涙をふいて、嬉しそうにご飯を食べていた姿が印象に残っているそうです。

今は、学校の給食でも、ほかほかの温かいご飯が出てきます。スーパーやコンビニでもご飯がすぐに見えます。もちろん家でも、おいしいご飯が山盛り食べられます。当たり前のように食べているご飯ですが、曾祖母の話聞き、十分に、ご飯が食べられなかった時

代があったことにおどろきました。そして、
私たちが好きな時に好きなだけ、ご飯が食べ
られることは、幸せだと思いました。以前は
お茶わんに米粒が残っていても、
「まあいいか。」

と、思っていました。今は一粒も残さずに
食べています。

今年の夏、私に疎開のことや戦争中のご飯
のことを教えてくれた曾祖母が亡くなりました。
曾祖母の仏さんには、ご飯がお供えして
あります。仏飯と言って、朝一番にたきたて
のご飯をお供えして、ご先祖様や仏様への感謝
の気持ち伝えるという意味があると母に
教わりました。

「ひいおばあちゃん、天国へ行って、おい
しいご飯をいっぱい食べてね。」
と、仏さんに話しかけています。

私は、ご飯が大好きです。大好きなご飯が
食べられることへの感謝の気持ちをこれから
も忘れずに、今日もご飯をおかわりします。